

第8回 ('15年12月2日: Keywords ... 6回の宿題の答え)

C-6-1. [直和]

次の2つのベクトル V_1, V_2 はベクトル空間 V の直和となるか示せ.

$$(1) V = \mathbb{C}^3, V_1 = \left\{ v \in \mathbb{C}^3 \mid \begin{pmatrix} 1 & 5 & 2 \\ 0 & 1 & -1 \end{pmatrix} v = 0 \right\}, V_2 = \{ v \in \mathbb{C}^3 \mid (1 \ 1 \ 1)v = 0 \}$$

$$(2) V = \mathbb{C}[x]_3, V_1 = \langle 1 - x^3, 5 + x + x^2 - 4x^3 \rangle, V_2 = \langle -2 + x^2 + 3x^3, x^2 + x^3 \rangle$$

(略解答)

$$(1) V_1 \cap V_2 \text{ を求めると、} V_1 \cap V_2 = \left\{ v \in \mathbb{C}^3 \mid \begin{pmatrix} 1 & 5 & 2 \\ 0 & 1 & -1 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix} v = 0 \right\} \text{ であるから、この方程式を実際解いてみると、}$$

$V_1 \cap V_2 = \{(0, 0, 0)\}$ が成り立つ. 次元公式から、 $\dim(V_1 + V_2) = \dim(V_1) + \dim(V_2) - \dim(V_1 \cap V_2) = 2 + 2 = 4$ が成り立つ. $V_1 + V_2$ は V の部分空間、かつ $\dim(V_1 + V_2) = \dim(V) = 4$ であることから $V_1 + V_2 = V$ が成り立たなければならない. よって、 $V_1 + V_2$ は V の直和となる.

(2) $v_1 = 1 - x^3, v_2 = 5 + x + x^2 - 4x^3, v_3 = -2 + x^2 + 3x^3, v_4 = x^2 + x^3$ とおく. $V_1 \cap V_2$ の任意の元は、 $av_1 + bv_2 = cv_3 + dv_4$ と書けなければならない. よって、

$$0 = av_1 + bv_2 - cv_3 - dv_4 = (v_1, v_2, -v_3, -v_4) \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \\ d \end{pmatrix} = (1, x, x^2, x^3) \begin{pmatrix} 1 & 5 & 2 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & -1 & -1 \\ -1 & -4 & -3 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \\ d \end{pmatrix}$$

が成り立ち、 $1, x, x^2, x^3$ が一次独立であるので、

$$\begin{pmatrix} 1 & 5 & 2 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & -1 & -1 \\ -1 & -4 & -3 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \\ d \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \quad (1)$$

でなければならない. しかし、この行列の行列式を、2行目に沿って展開、基本変形、展開を繰り返すことで

$$\det \begin{pmatrix} 1 & 5 & 2 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & -1 & -1 \\ -1 & -4 & -3 & -1 \end{pmatrix} = \det \begin{pmatrix} 1 & 2 & 0 \\ 0 & -1 & -1 \\ -1 & -3 & -1 \end{pmatrix} = \det \begin{pmatrix} 1 & 2 & 0 \\ 0 & -1 & -1 \\ 0 & -1 & -1 \end{pmatrix} = \det \begin{pmatrix} -1 & -1 \\ -1 & -1 \end{pmatrix} = 0$$

と計算できる. よって、(1) の 4×4 行列は正則ではないので、これは、連立一次方程式 (1) に $(0, 0, 0, 0)$ 以外の解 (a, b, c, d) が存在することを意味する. $V_1 \cap V_2$ には、 $\{0\}$ 以外の解が存在することになる. 特に、 $V_1 \cap V_2 \neq \{0\}$ が成り立つ. これは $V_1 + V_2$ が V において直和にならないことを意味する.

C-6-2. [共通部分のベクトル空間の次元]

V を 4 次元ベクトル空間とし、 $V_1 = \langle v_1, v_2 \rangle, V_2 = \langle v_3, v_4 \rangle$ を V の部分ベクトル空間で、どちらも 2 次元とする. このとき、 $V_1 \cap V_2$ の次元は、 v_1, v_2, v_3, v_4 の条件によってどのように変化するか?

(略解答)

次元公式から $\dim(V_1 \cap V_2) = \dim(V_1) + \dim(V_2) - \dim(V_1 + V_2) = 4 - \dim(V_1 + V_2)$ が成り立つので、 $\dim(V_1 + V_2)$ を求めればよい. $V_1 + V_2 = \langle v_1, v_2, v_3, v_4 \rangle$ である. よって、 $\langle v_1, v_2, v_3, v_4 \rangle$ の次元 d は、この 4 つのベクトルのうち一次独立なベクトルの最大と等しい. V の適当な基底 $\{w_1, w_2, w_3, w_4\}$ をとる. この基底を使って $(v_1, v_2, v_3, v_4) = (w_1, w_2, w_3, w_4)A$ とすることで、これらのベクトルの表示行列 A を得る. $d = \text{rank}(A)$ となる. 今後、この d, A を使って議論する. 今、 v_1, v_2 が一次独立であるから、少なくとも $d = \text{rank}(A) \geq 2$ である. つまり、 $d = 2, 3, 4$ のどれか.

$d = 2$ となるとき、 V_1 は $V_1 + V_2$ の部分ベクトル空間だから、 $2 = \dim(V_1 + V_2) \geq \dim(V_1) = 2$ が成り立つので、 $V_1 + V_2 = V_1$ がいえる. この条件から特に、 V_2 の任意の元 $cv_3 + dv_4$ が v_1, v_2 の一次結合で書ける. つまり、 $V_2 \subset V_1$ であり、どちらも 2 次元なので、 $V_1 = V_2$ となる.

$d = 3$ となるとき、 $\text{rank}(A) = 3$ であり、この条件は、 $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4$ のうちある 3 つが一次独立であり、かつその残りの一つは他の 3 つの一次結合で表せる。

$d = 4$ となるとき、 $\text{rank}(A) = 4$ であり、この条件は、 A が正則であること、言い替えれば $\{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4\}$ が V の基底となるときである。

まとめれば、

$\dim(V_1 \cap V_2) = 0 \Leftrightarrow \{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4\}$ が V の基底となるとき。

$\dim(V_1 \cap V_2) = 1 \Leftrightarrow \{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4\}$ のうち 3 つが 1 次独立であり、残りの一つがその 3 つの一次結合で表せるとき。

$\dim(V_1 \cap V_2) = 2 \Leftrightarrow \langle \mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2 \rangle = \langle \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4 \rangle$ となるとき。

となる。

C-6-3. [共通部分のなすベクトル空間]

ベクトル空間 $V = \mathbb{C}[x]_3$ とその部分空間

$$V_1 = \langle 1 + x + x^3, x - x^2, 1 + x - x^2 \rangle, V_2 = \langle 1 + x - x^3, 1 - 2x^2 \rangle$$

を考える。

(1) 共通部分 $V_1 \cap V_2$ のなすベクトル空間の基底となる **多項式** を求めよ。

(2) V_1, V_2 のどちらの基底も、 $V_1 \cap V_2$ の基底を含む形に直せ。

(略解答)

(1) $\mathbf{v}_1 = 1 + x + x^3, \mathbf{v}_2 = x - x^2, \mathbf{v}_3 = 1 + x - x^2, \mathbf{v}_4 = 1 + x - x^3, \mathbf{v}_5 = 1 - 2x^2$ とする。 $V_1 \cap V_2$ の任意の元は、 $a\mathbf{v}_1 + b\mathbf{v}_2 = c\mathbf{v}_3 + d\mathbf{v}_4 + e\mathbf{v}_5$ と表されるから、C-6-1 と同様な議論から

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & -1 & -1 \\ 1 & 1 & -1 & -1 & 0 \\ 0 & -1 & 1 & 0 & 2 \\ 1 & 0 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \\ d \\ e \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \quad (2)$$

となる。この行列を簡約化して、

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & -1 & -1 \\ 1 & 1 & -1 & -1 & 0 \\ 0 & -1 & 1 & 0 & 2 \\ 1 & 0 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & -1 & -1 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & -1 & 1 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & 2 & 1 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & -1 & -1 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 3 \\ 0 & 0 & 1 & 2 & 1 \end{pmatrix}$$

$$\rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & -1 & 2 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 3 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & -2 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 3 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & -1 \end{pmatrix}$$

となるので、 (a, b, c, d, e) を解き、その基底は、 $(a, b, c, d, e) = (-1, -1, -3, 1, 1)$ となり、 $\dim(V_1 \cap V_2) = 1$ となる。よって $-\mathbf{v}_1 - \mathbf{v}_2 = -1 - x - x^3 - (x - x^2) = -1 - 2x + x^2 - x^3$ が共通部分のなすベクトル空間の基底となる。

(2) $\mathbf{v}_6 = -1 - 2x + x^2 - x^3$ とすると、 $\mathbf{v}_6, \mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2$ の中からこの順に一次独立なベクトルを最大数選ぶ。

$$(\mathbf{v}_6, \mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2) = (1, x, x^2, x^3) \begin{pmatrix} -1 & 1 & 0 \\ -2 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & -1 \\ -1 & 1 & 0 \end{pmatrix}$$

なる表示行列が得られ、これを簡約化すると、

$$\begin{pmatrix} -1 & 1 & 0 \\ -2 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & -1 \\ -1 & 1 & 0 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & -1 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

ゆえに、 $\mathbf{v}_6, \mathbf{v}_1$ が V_1 の基底となり、 $V_1 = \langle \mathbf{v}_6, \mathbf{v}_1 \rangle$ である。

次に、 $\mathbf{v}_6, \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4, \mathbf{v}_5$ の中からこの順に一次独立なベクトルを最大数選ぶ。

$$(\mathbf{v}_6, \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4, \mathbf{v}_5) = (1, x, x^2, x^3) \begin{pmatrix} -1 & 1 & 1 & 1 \\ -2 & 1 & 1 & 0 \\ 1 & -1 & 0 & -2 \\ -1 & 0 & -1 & 0 \end{pmatrix}$$

なる表示行列が得られ、これを簡約化すると、

$$\begin{pmatrix} -1 & 1 & 1 & 1 \\ -2 & 1 & 1 & 0 \\ 1 & -1 & 0 & -2 \\ -1 & 0 & -1 & 0 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 & 3 \\ 0 & 0 & 1 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

ゆえに、 $\mathbf{v}_6, \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4$ が V_2 の基底となり、 $V_2 = \langle \mathbf{v}_6, \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4 \rangle$ である。